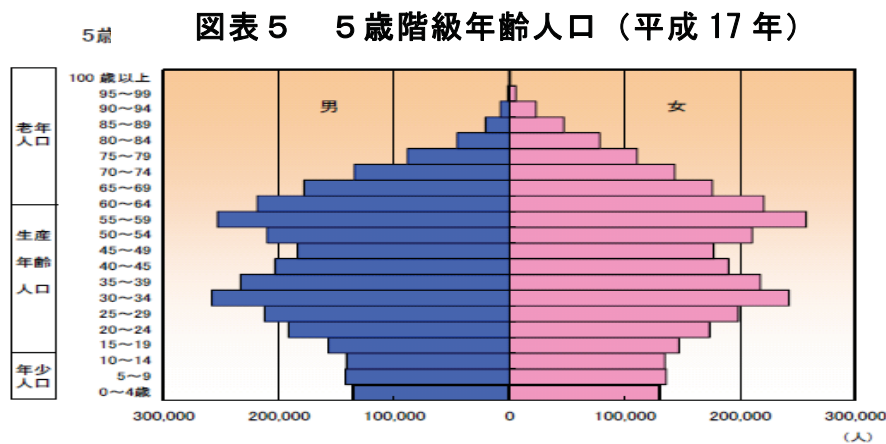


第2章 ちばの「食育」の現状

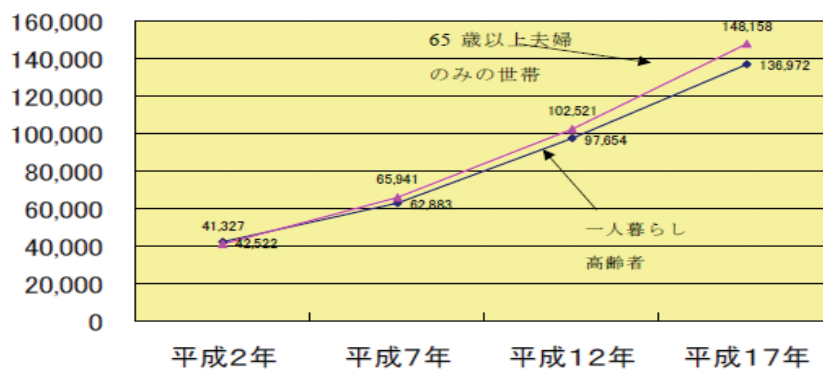
1. ちばの「食」をめぐる現状

(1) 千葉県の人口・世帯構造から見た食育の必要性

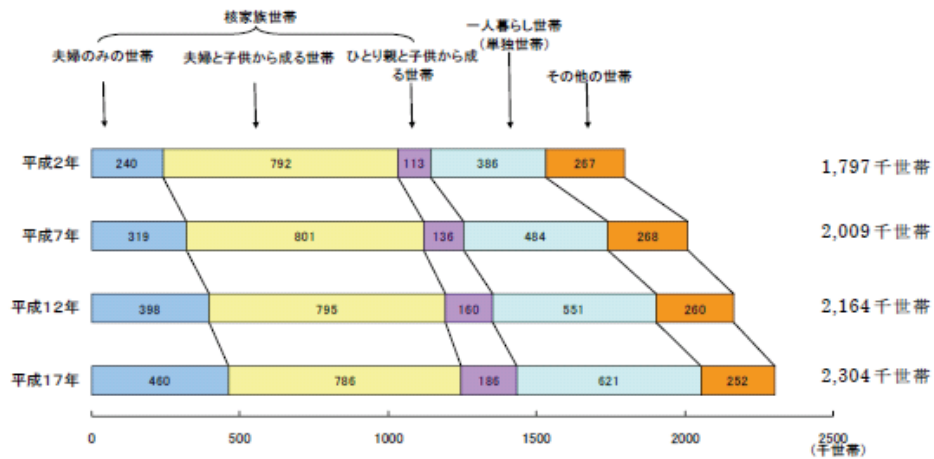
- 子育ての時期を迎えている30歳前後に人口のピークがあり、自らの健康の維持に加え、子どもの健全な食習慣の形成の面からも、この世代を対象とした食育に取り組むことが急務です。
- 千葉県は、平均年齢が42.4歳と全国で6番目に若いことが特徴ですが、団塊の世代と呼ばれる60歳前後に人口のピークがあり、現在、全国2位のスピードで高齢化が進んでいます。今後は、高齢化に伴う生活習慣病の患者数の増大が予測されており、さらに若い世代を含め食生活の面からも生活習慣病の改善と予防に取り組むことが必要です。
- 世帯構造の面では、核家族世帯や単独世帯が増加してきており、日本型の食生活などの「食の伝承の場」が失われてきています。大人が意識して伝承していく取組が必要です。



世帯 図表6 高齢者世帯の推移



図表7 一般世帯の家族類型別世帯数の推移



資料：平成17年国勢調査（千葉県）

(2) ライフスタイルの変化による食習慣の乱れ

① 夜型生活スタイルの増加等による朝食の欠食

○ 食事・運動・睡眠という基本的な生活習慣が毎日の生活の中で適切に営まれることが大切です。高校生の4人に1人は朝食を欠食しており、20代男性では欠食率が4割を超えています。また、小・中学生にも朝食の欠食がみられます。これは基本的な生活習慣の乱れを物語っており、親の生活習慣に引きずられていると考えられます。特に子どもにとっては、体調調節はもちろん脳の活性化や心の安定に影響する朝食をしっかり摂ることが大切です。

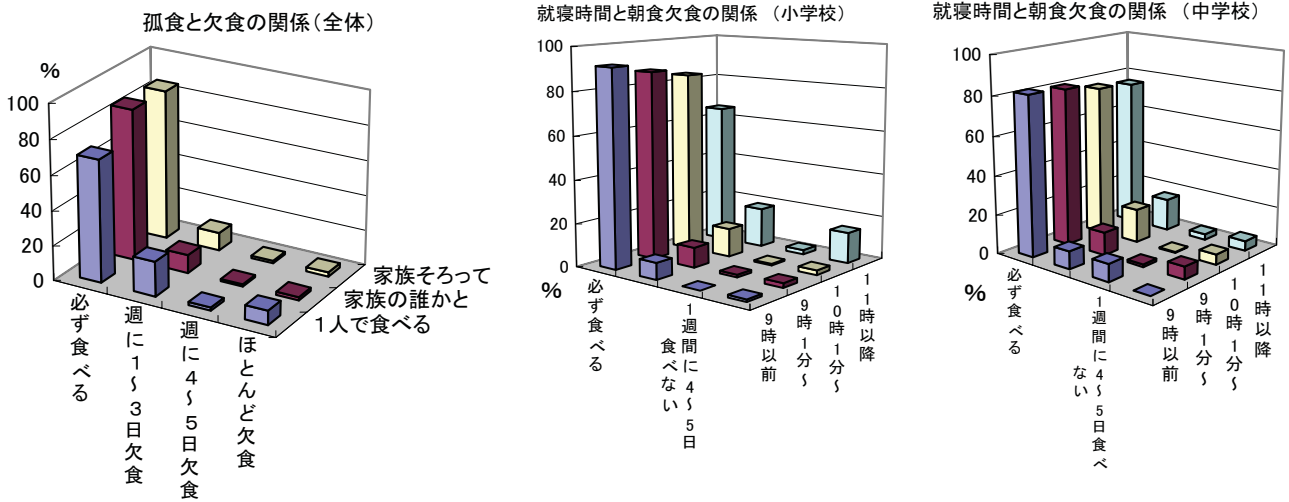
図表8 朝食の欠食率（小・中学生、高校生：千葉県）

	小学5年生	中学2年生	高校生
必ずとる	80.1	71.6	64.2
たいていとる	14.1	17.8	9.0
とらないことが多い	4.4	7.0	14.7
全くとらない	1.4	3.6	10.7

資料：小中学生「平成17年度千葉県学力状況調査報告書」

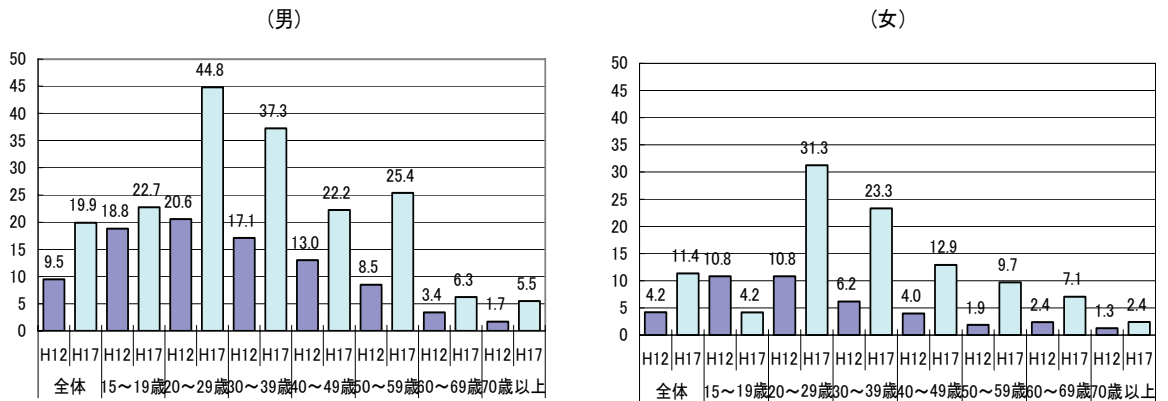
高校生「平成16年度高校生の生活状況と意識に関する調査結果」(千葉県)

図表9 児童生徒の孤食・就寝時間と朝食欠食の関係



資料：平成17年度児童生徒の食生活等実態調査報告書(千葉県)

図表10 平成12年と平成17年の朝食の欠食率の比較(性・年齢段階別)

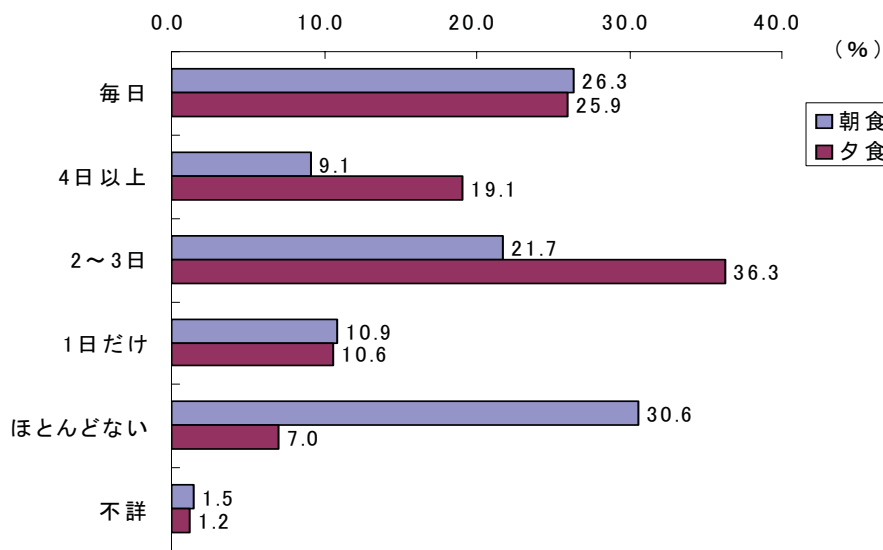


資料：千葉県民健康・栄養調査報告(平成12年度・17年度)

②家庭での共食の減少等による孤食の増加

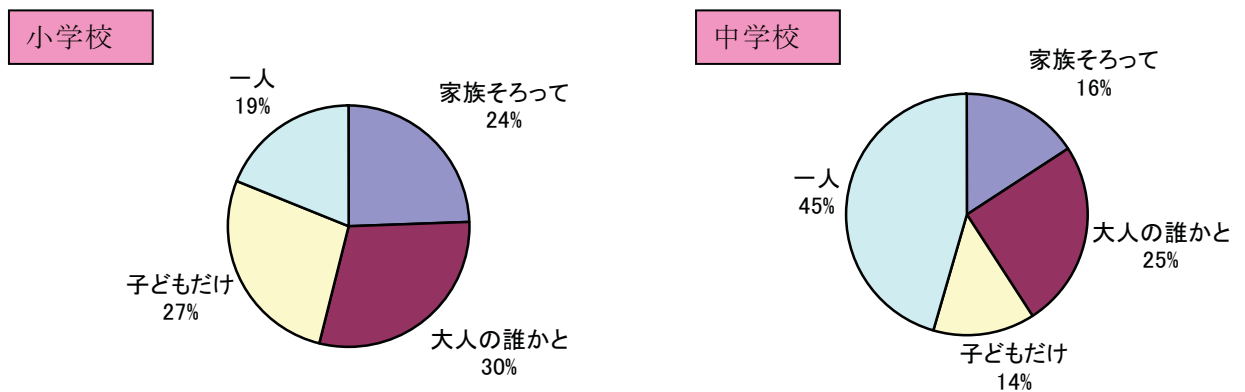
○忙しい生活を送る中で、子どもが一人で食事をする「孤食」の増加の問題が指摘されています。食卓は、家族の様子が見える場であり、家庭の食の伝承の場でもあります。また、食卓での会話は家族の絆を深め、子どもの対人関係能力を高めることにもつながり、食卓が持つ意味は大きいものです。家族それぞれが忙しい生活を送っている中で意識して家族の接点を見つける工夫が必要です。

図表 11 一週間のうち、家族そろって一緒に食事(朝食及び夕食)をする日数



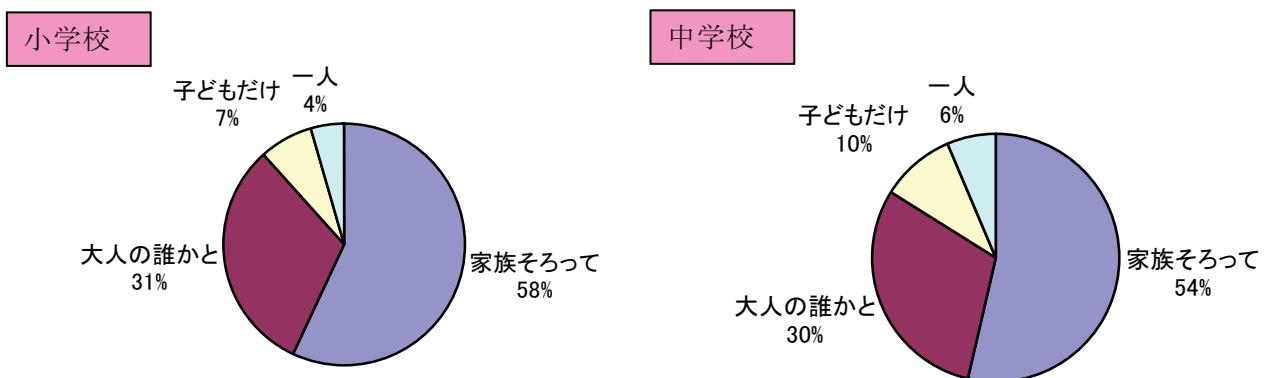
資料：平成 16 年度全国家庭児童調査結果（厚生労働省）

図表 12 児童生徒が誰と朝食を食べているか(%)



資料：平成 17 年度児童生徒の食生活等実態調査報告書（千葉県）

図表 13 児童生徒が誰と夕食を食べているか (%)



資料：平成 17 年度児童生徒の食生活等実態調査報告書（千葉県）

③食事にかける時間が短く、よくかんで味わう食習慣の減少

○咀嚼力の低下（摂食機能の低下）は、味覚能力の低下等にもつながり、食事を楽しむことができなくなるなどの弊害の原因となります。食事を楽しみながらよく噛んで食べることが心身の健康や肥満予防にもつながります。

④家庭における手づくり料理の減少

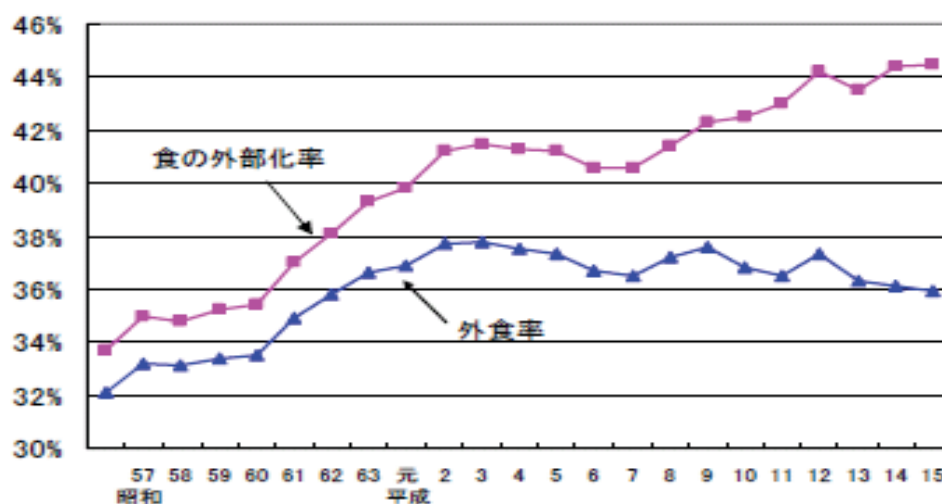
○外食や惣菜・調理食品の購入など、食の外部化が進み、家庭における手づくり料理の減少が指摘されています。また、インスタント食品の多用による味覚形成の不具合や栄養の偏りが生じやすい状況にあります。子どもの成長や家族の体調に合わせた食事の準備をするためには、基本的な調理技術を持つことが必要です。

(3) 栄養バランスのくずれ

①食の変化と栄養の偏り

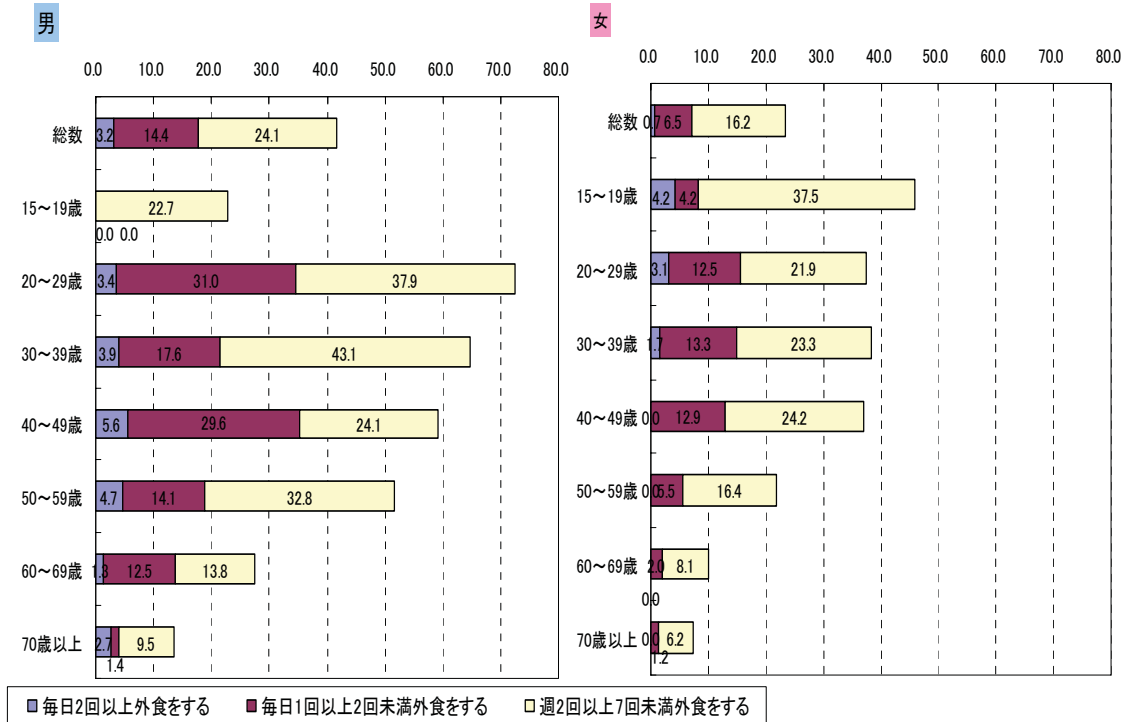
○食の外部化や簡素化志向の高まりなどにより、日本型の食生活が崩壊しつつあり、野菜摂取量の減少、若年層のカルシウム摂取量不足といった栄養の偏りがみられます。

図表 14 食料消費支出に占める外部化率の推移



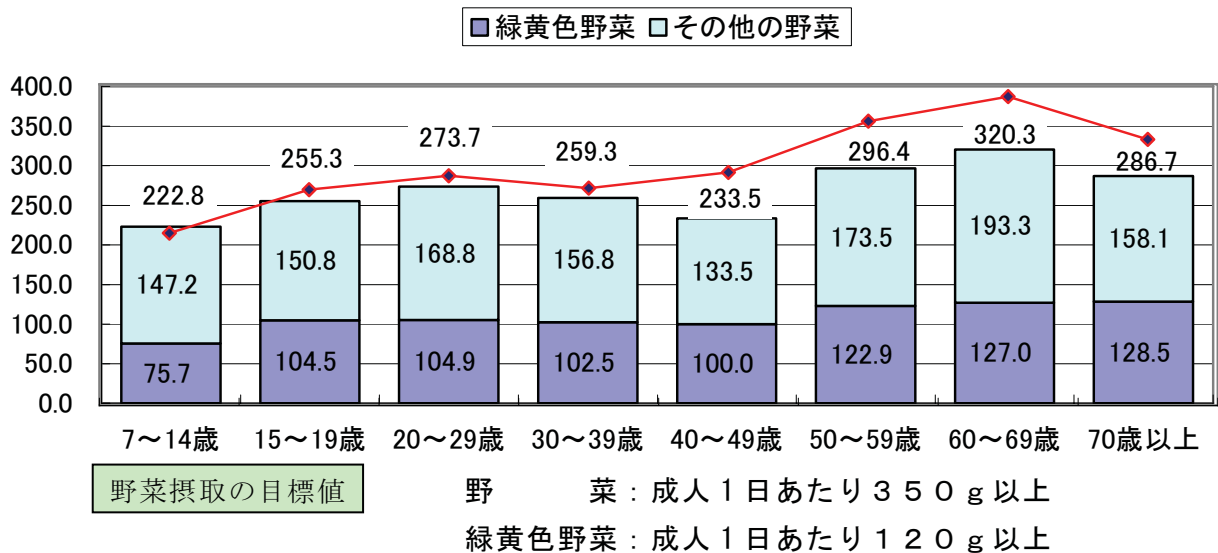
(資料) 内閣府「国民経済計算報告」、(財)外食産業総合調査研究センター「外食産業市場規模」、日本たばこ産業(株)資料を基に農林水産省で試算
(注) 外食率…食料消費支出に占める外食の割合
食の外部化率…外食率に惣菜・調理食品の支出割合を加えたもの

図表 15 外食の摂食状況（性・年齢階層別）



資料：平成 17 年度千葉県民健康・栄養調査報告

図表 16 年齢階層別 1 日あたりの野菜の平均摂取量 (g)



※棒グラフと数値は平成 17 年、折れ線グラフは平成 12 年の合計

資料：千葉県民健康・栄養調査報告(平成 12 年度・17 年度)を基に作成

図表 17 性別・年齢階層別にみたカルシウムの摂取状況(平均値)
(平成 17 年：千葉県)

年齢(歳)	カルシウム 摂取量 (mg/日)		カルシウム 目標量* (mg/日)	
	男性	女性	男性	女性
6～7	662	576	600	600
8～9	617	665	700	700
10～11	834	547	800	800
12～14	795	657	900	750
15～17	502	544	850	650
18～29	507	521	650	600
30～49	468	467	600	600
50～69	586	612	600	600
70 以上	586	516	600	550

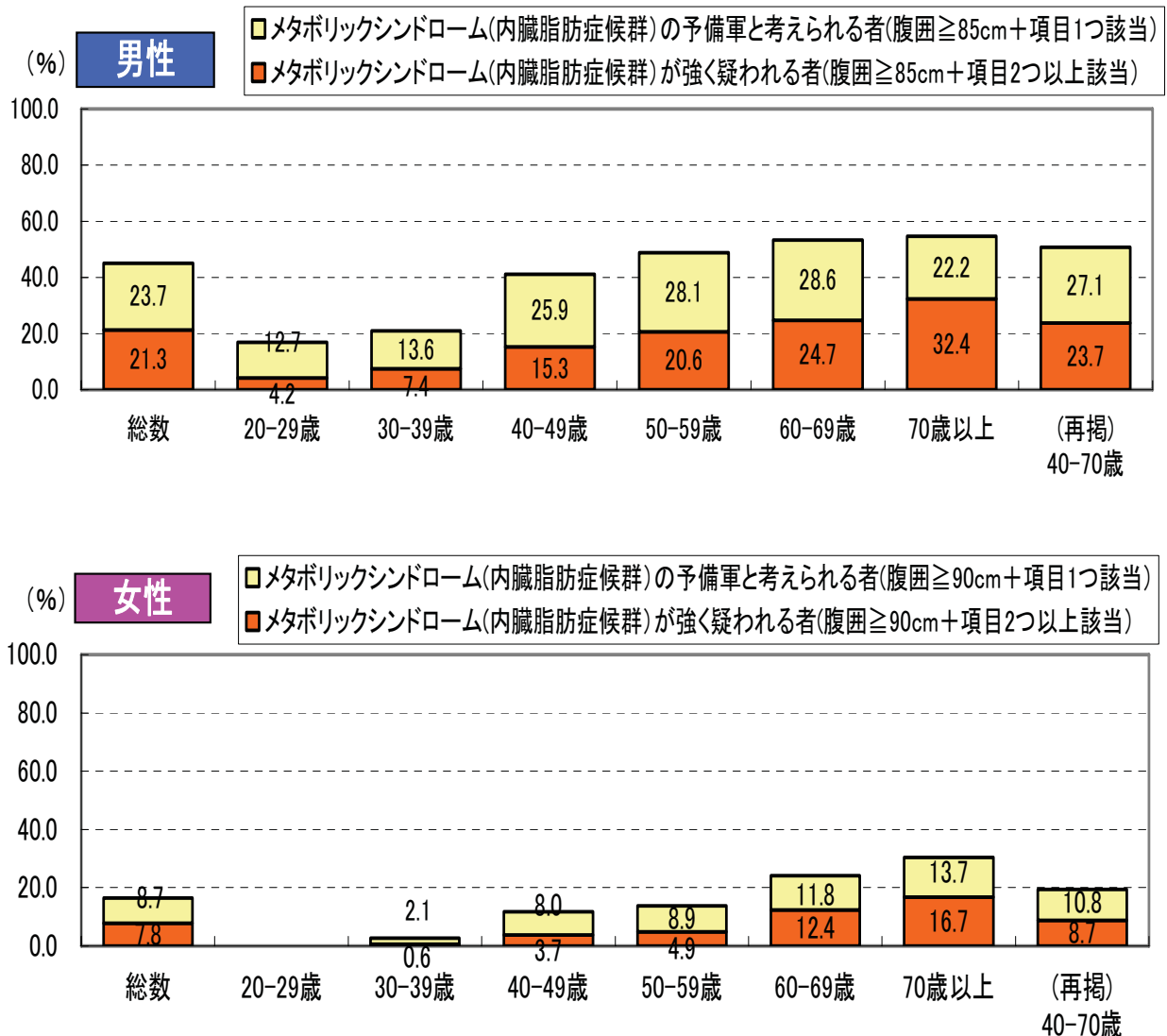
資料：平成 17 年度千葉県民健康・栄養調査結果報告を基に作成

* 日本人の食事摂取基準（2005 年版）より

②肥満・メタボリックシンドローム、やせといった健康面への影響

○肥満の割合は、40 代～50 代の男性では 3 割を超えています。メタボリックシンドロームが強く疑われる人と予備軍と考えられる人を合わせた割合は男女とも 40 歳以上で高くなっており、男性では 2 人に 1 人、女性では 5 人に 1 人が該当しています。

図表 18 メタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)の状況(20歳以上)

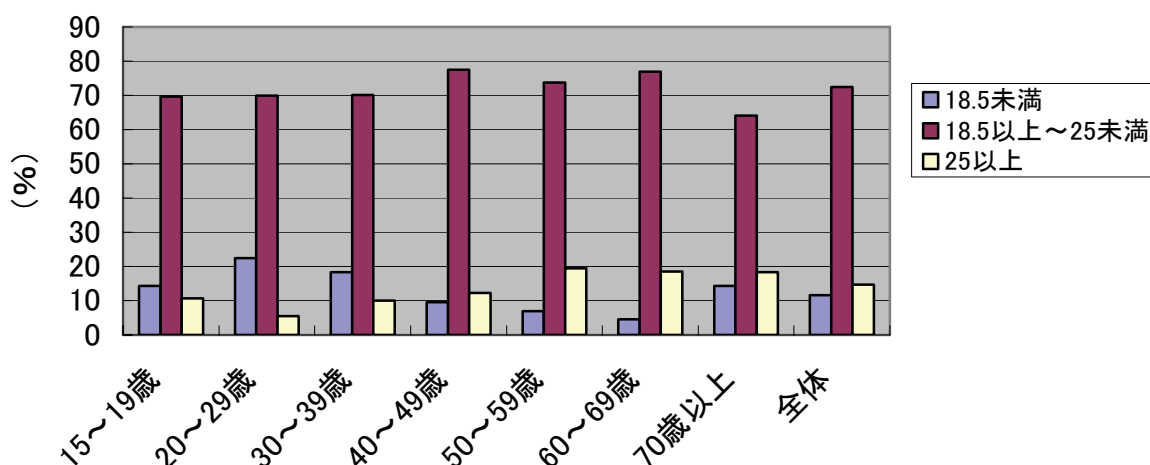


※各年代のメタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)が強く疑われる者と予備軍と考えられる者について、平成16年10月1日現在推計の男女別、年齢階級別の40-74歳人口(全体約5,700万人)を用い、それぞれ有病者、予備軍として推計したところ、40-74歳におけるメタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)の有病者数は約940万人、予備軍者数は約1,020万人、併せて約1,960万人と推測される。

資料：平成17年国民健康・栄養調査結果の概要（厚生労働省）

○『やせ』の割合は女性 20 代・30 代で高く、2 割前後になっています。

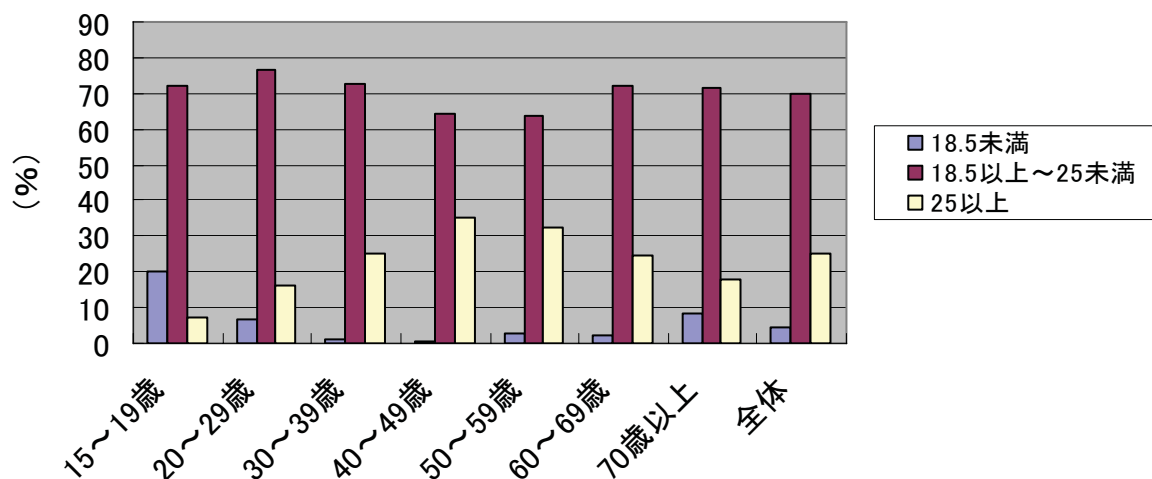
図表19 性・年齢階層別、BMI判定区分(女)平成17年:千葉県



BMI: (Body Mass Index) 体重(kg)を身長(m)の2乗で割って求める肥満の判定方法で「BMI=22」を適正とし、18.5未満を「やせ」、18.5以上25未満を「正常」、25以上を「肥満」に分類

資料:平成17年度生活習慣に関するアンケート調査報告書(千葉県)

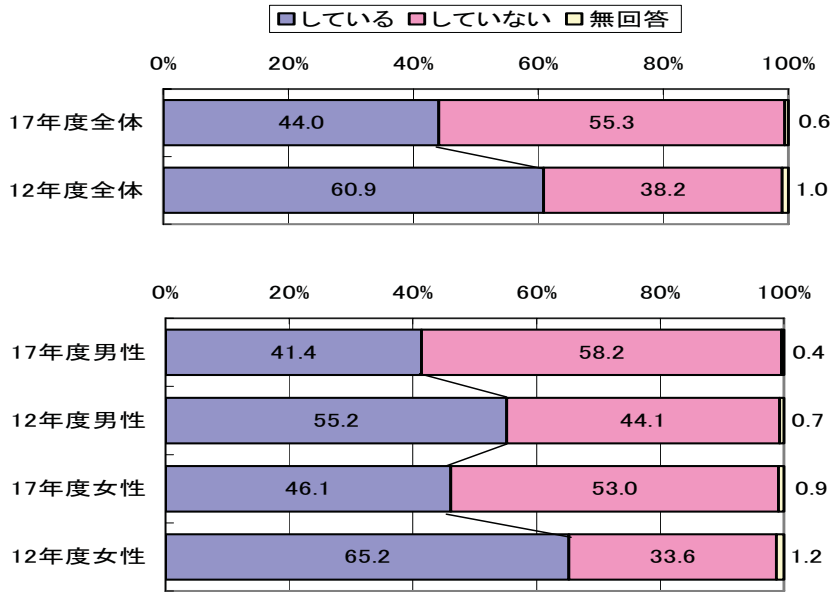
図表20 性・年齢階層別、BMI判定区分(男)平成17年:千葉県



資料:平成17年度生活習慣に関するアンケート調査報告書(千葉県)

○食事の量をコントロールして体重管理をしている人の割合が減少してきています。個人に応じた望ましい食生活を実践することが必要です。

図表 21 体重管理のための食事量のコントロール



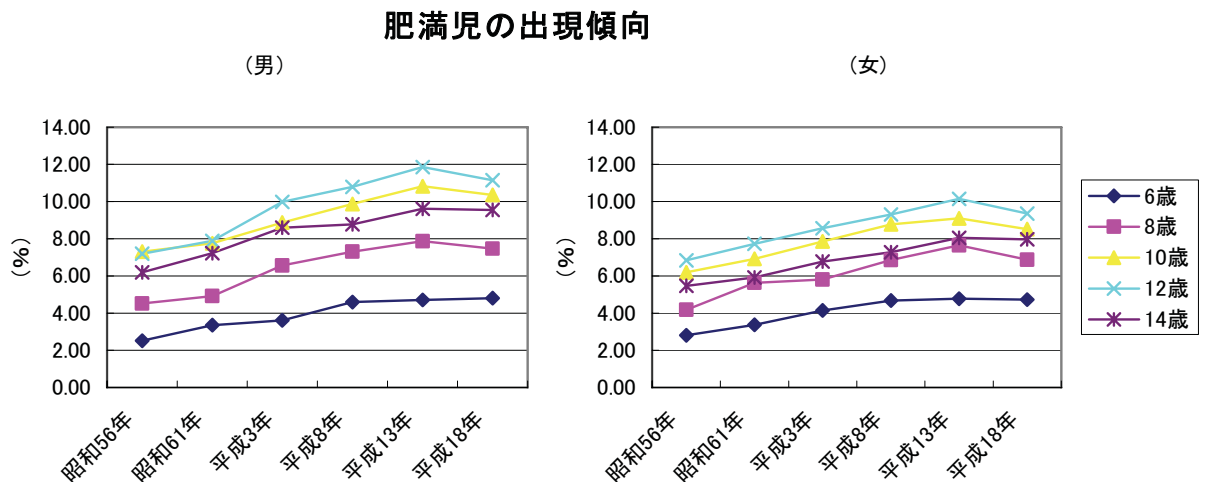
資料：平成 12 年度県民栄養調査

平成 17 年生活習慣に関するアンケート調査（千葉県）

③子どもの健康への影響

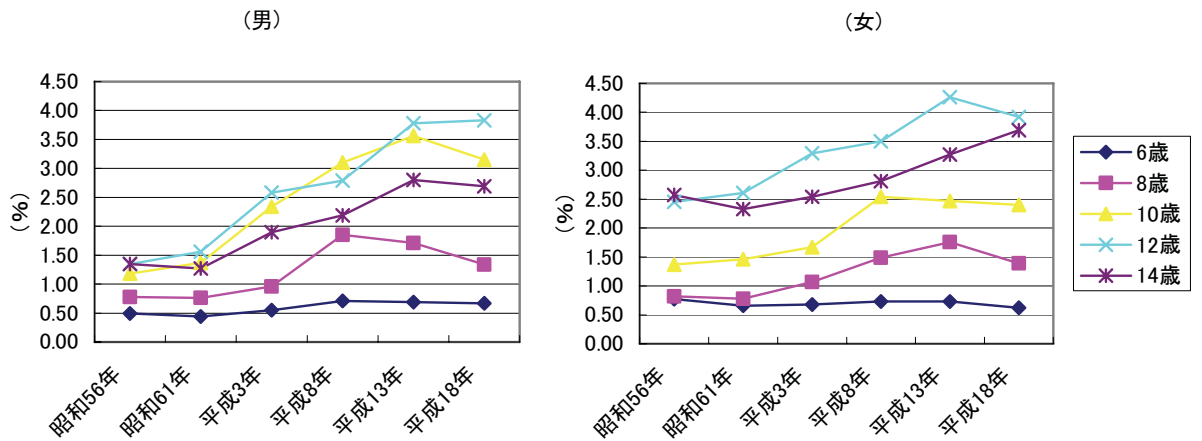
○食生活や生活習慣の乱れやストレスなどの様々な要因により子どもの健康に悪影響が現れています。子どもたちの健康について将来への不安がある中、生活習慣病に罹る大人の増加が懸念されます。また、子どもたちの肥満とやせの増加や外食による個食化がもたらす味覚形成上の問題などが指摘されています。

図表 22 児童・生徒の肥満・やせの割合の推移



資料：文部科学省：平成 18 年度学校保健統計調査を基に作成

痩身児の出現傾向



資料：文部科学省：平成 18 年度学校保健統計調査を基に作成

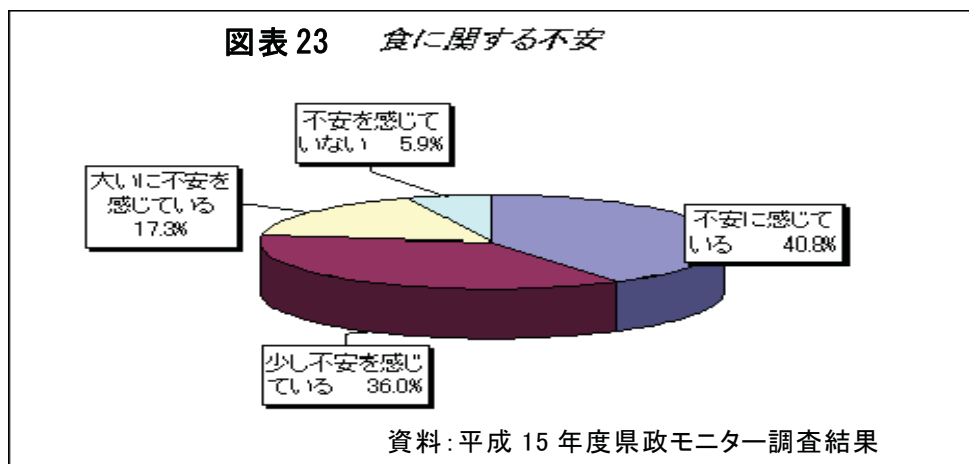
【参考】小児生活習慣病の実態把握を目的に、市川市が平成 17 年度に市内の公立小学校 5 年生・中学校 1 年生の希望者を対象に実施した健診では、独自に設定した判定基準に照らして判断した結果、生活注意対象者が全体の 21.2%、健康相談・個別指導対象者が 5.1%、医師による指導または要医療対象者が 5.3%であった。

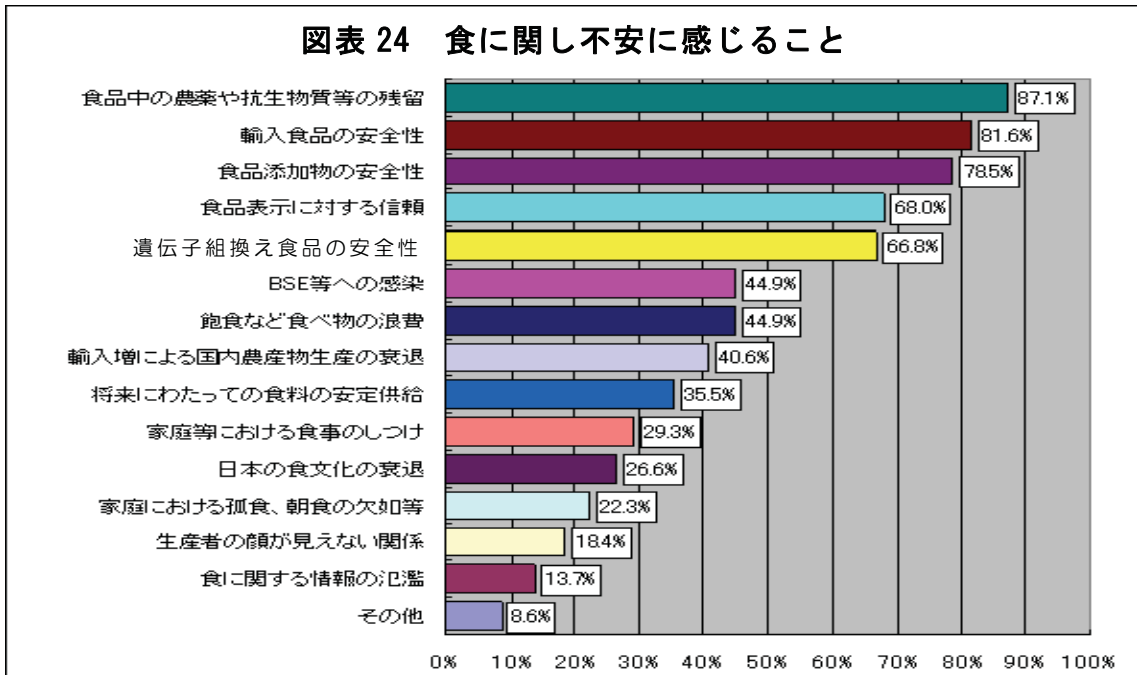
参考図書：「平成 17 年度市川市小児生活習慣病予防健診報告」

千葉県医師会雑誌（平成 18 年 6 月・7 月・8 月号に掲載）

（４）食の安全性の問題

○「食」に関して不安を感じている人は 9 割を超えており、不安感は残留農薬や輸入食品、食品添加物に関するものが特に高くなっています。

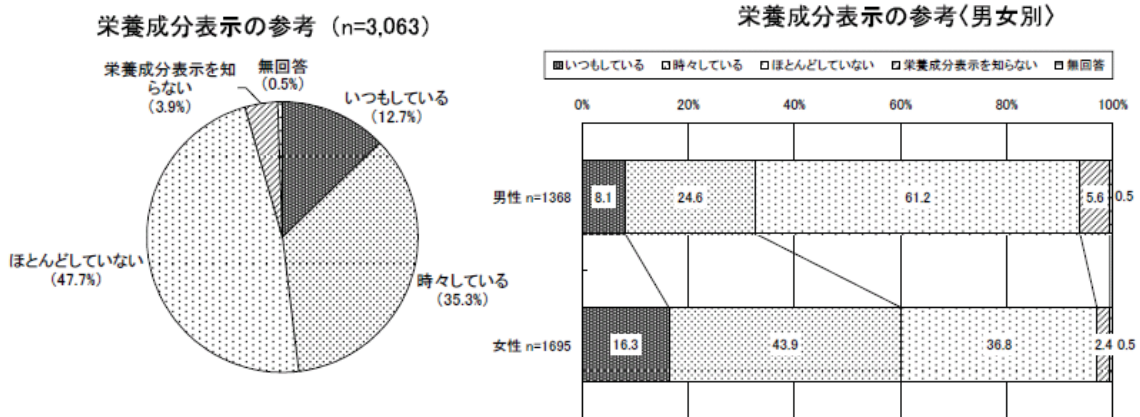




資料：平成 15 年度県政モニター調査結果

○食品表示については賞味期限を特に気にしており、栄養成分や原材料、原産地など、「食」に関し、本来、重要視すべき情報についてはあまり意識されていない現状にあります。

図表 25 栄養成分の表示を参考にしているか（千葉県）



資料：平成 17 年生活習慣に関するアンケート調査（千葉県）

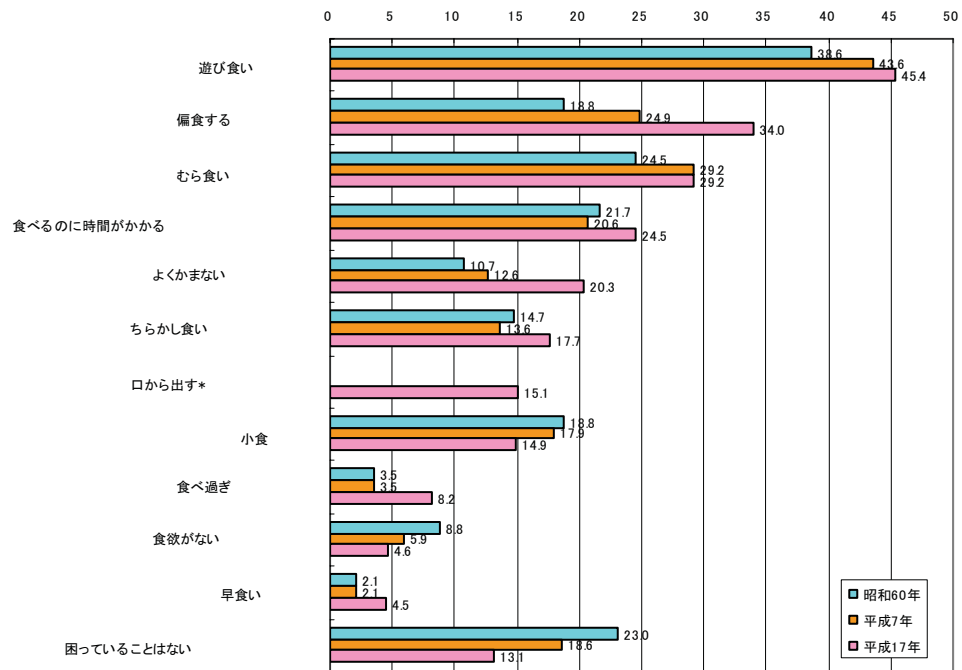
(5) 家庭での食育機能の低下

①「よく噛まない」など基本的な食習慣を身につけることができていない子どもがいます。

○子どもの食事について「遊び食い」「偏食する」「よく噛まない」が増加しており、家庭で基本的な食習慣を身につけることができていない状況がうかがえます。（「困っていることはない」とする割合は減少傾向で全体の 13%に過ぎません）

図表 26 子どもの離乳食や食事で困っていること

(%)

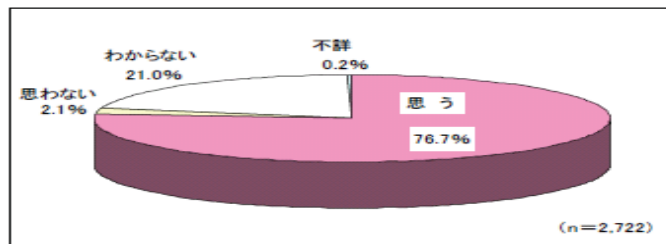


資料：平成 17 年度乳幼児栄養調査結果の概要（厚生労働省）

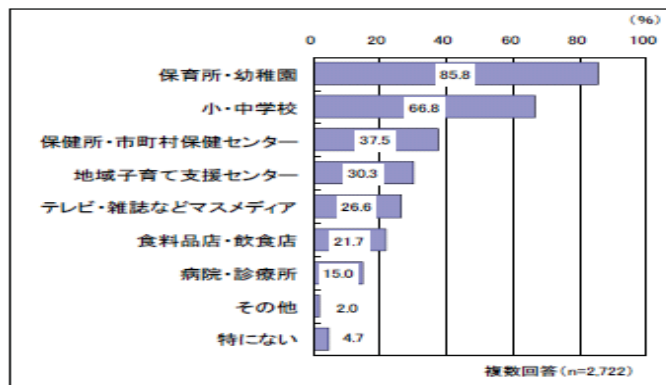
- 「家庭での食事や生活を通して、子どもが健康的な食習慣を身につけていくことができると思う」割合は約 8 割と高く、家庭における食育機能の重要性は認識しています。

図表 27 平成 17 年度乳幼児栄養調査における「食育について」の質問

家庭での食事や生活を通して、子どもが健康的な食習慣を身につけていくことができると思うか



子どもが健康的な食習慣を身につけていくのに取組が必要な機関

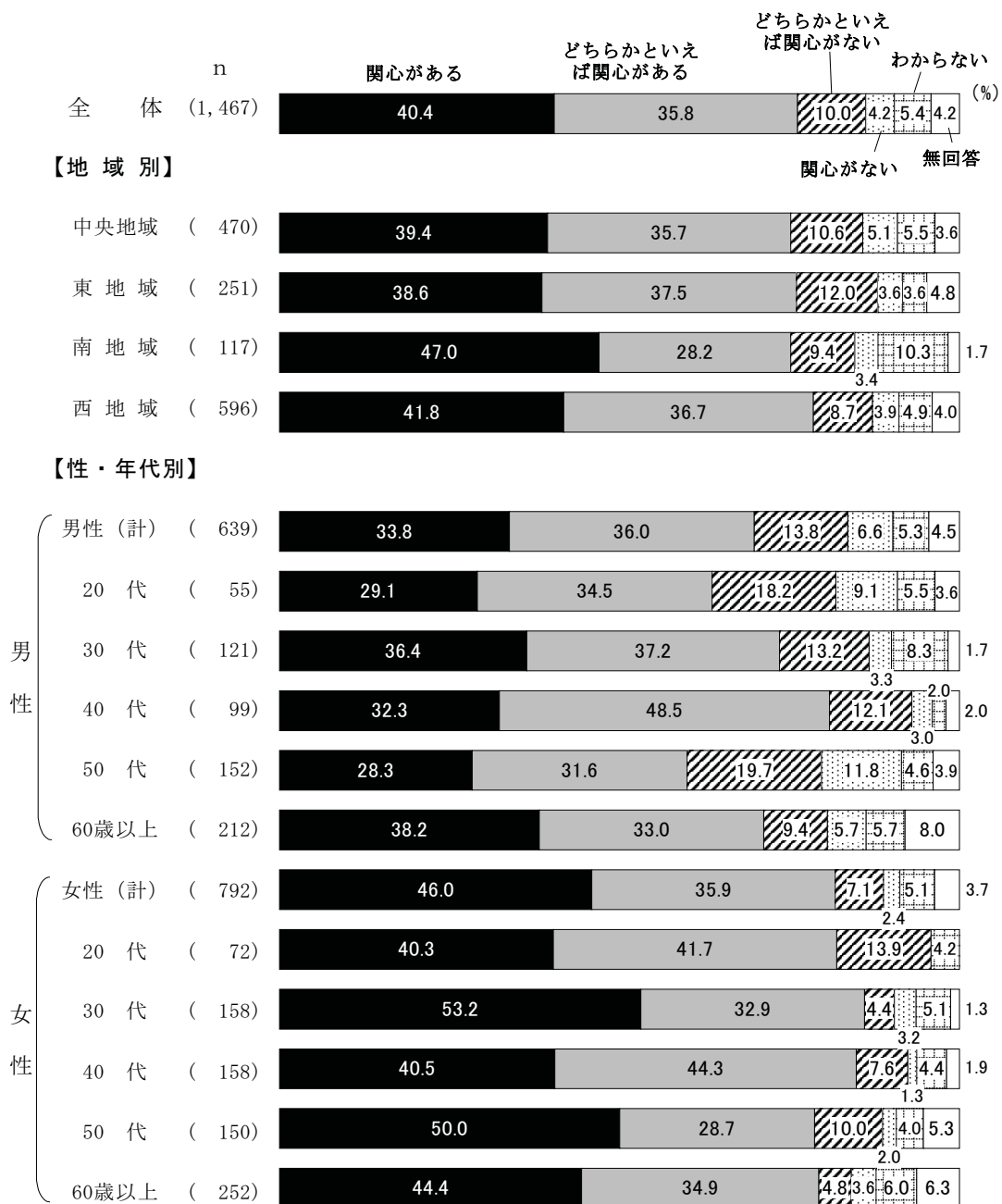


資料：平成 17 年度乳幼児栄養調査（厚生労働省）

* 調査対象：4 歳未満の子どものいる世帯

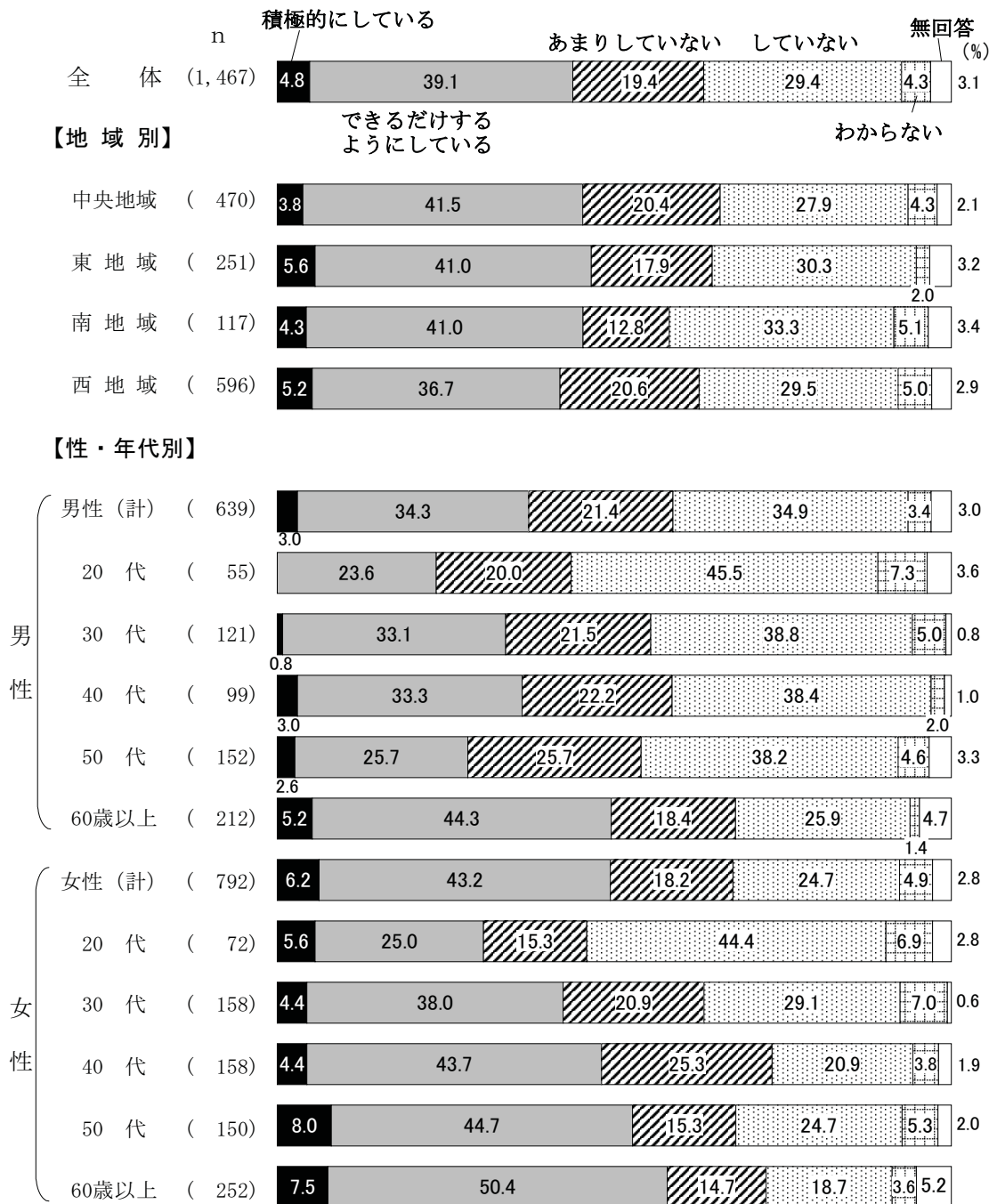
○食育に関して、(子育て期と推測される)女性30代では86%が関心をもっており、全年代を通じて最も高くなっていますが、活動や行動ができていくとする割合は42%にとどまり、意識と行動のギャップが大きくなっています。夫婦共働き世帯が増加してきていることから子育て多忙期の世帯を地域で支援していくシステムの確立が課題といえます。

図表 28 「食育」の関心度／地域別、性・年代別



資料：平成18年度第32回県政に関する世論調査結果

図表 29 食育に関する活動や行動／地域別、性・年代別



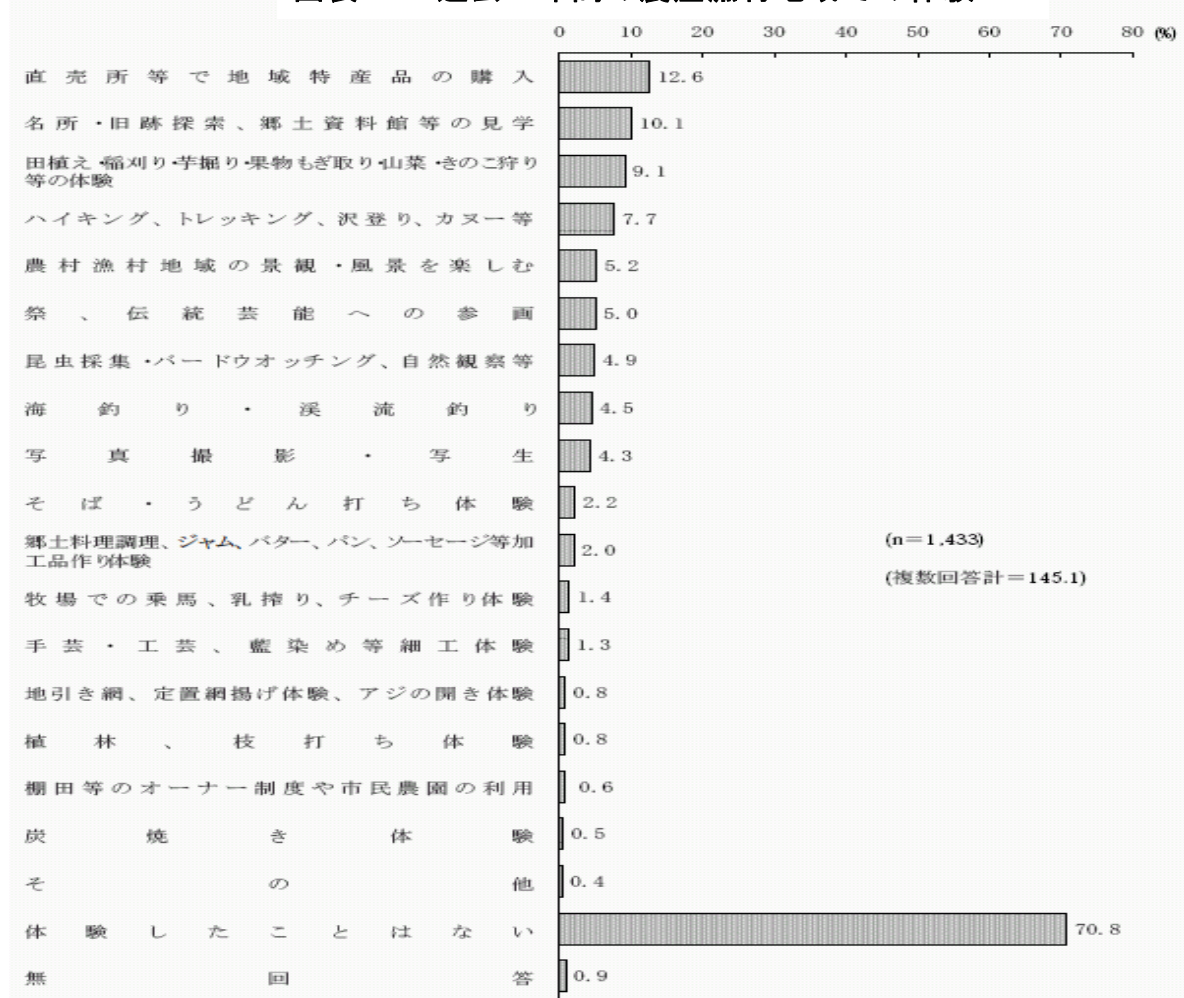
資料：平成18年度第32回県政に関する世論調査結果

(6) 食文化に対する意識の低下

① 県民の7割が農山漁村での体験は「したことはない」と回答

- 過去1年間に農山漁村地域での様々な食農体験を「したことはない」人が7割を占めています。千葉県は農林水産業が盛んで多くの食に関する生産拠点があり、もっと活用することが望まれます。
- 祭・伝統芸能への参画は5%、郷土料理教室への参加は2%と低く、内閣府が平成18年度に実施した食育に関する意識調査では、郷土料理・伝統食を知らない人が約3割おり、行事食を伴う伝統的行事の頻度では、年間7回以上が約5割であったのに対して、1~2回、全く行わない人が約1割で世代が若くなるほど回数が少なくなる傾向にあります。
- 家庭における食文化や伝統文化を伝承していく機会の減少、意識の低下が課題といえます。

図表30 過去1年間の農産漁村地域での体験



資料：平成16年度第30回県政に関する世論調査結果

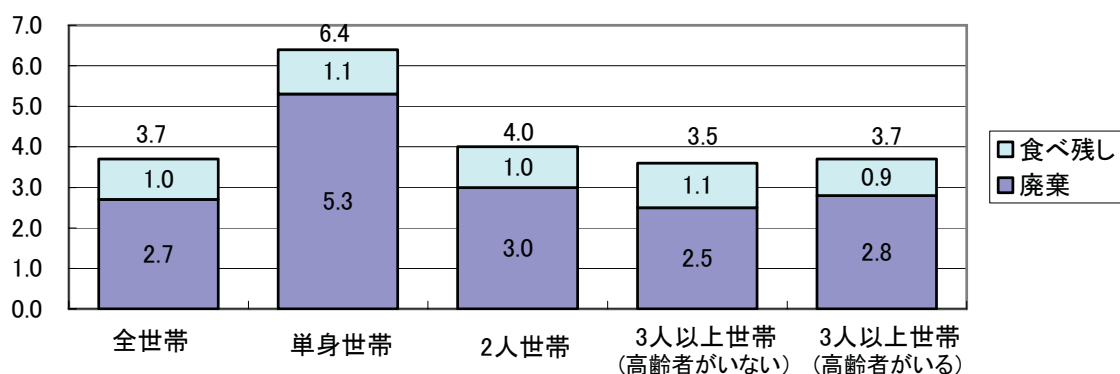
○食生活は生産者をはじめ多くの人々の苦労や努力に支えられて成り立つものです。そのことを実感してもらうためには、様々な体験活動が重要です。子どもだけでなく大人も、地元にある生産拠点を活用した体験活動の機会を増やしていくことが、自然の恩恵や生産者等に対する感謝の念を持つことにつながり、ひいては、地元の魅力の再発見につながり、「ちば」で暮らす喜びを実感することにつながるものと考えられます。

(7) 家庭における食品の食べ残しと廃棄の問題

①家庭における食品の食べ残しと廃棄

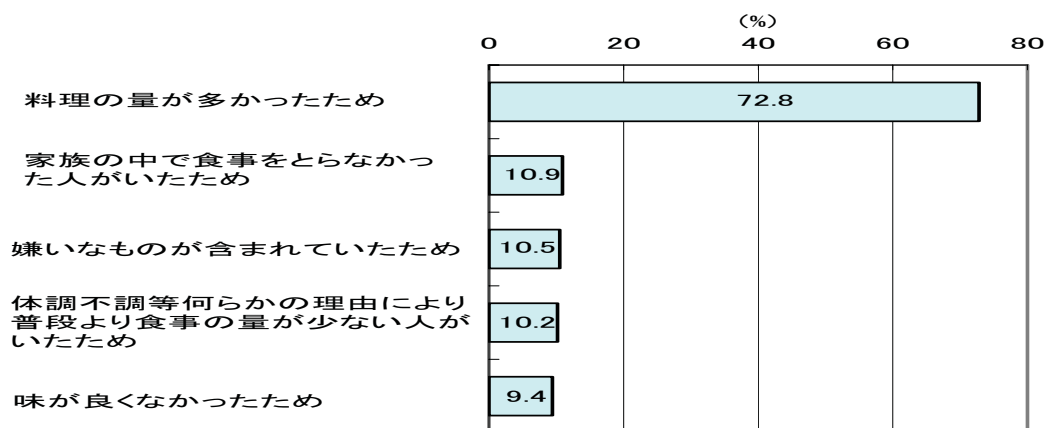
○日常生活において食料が豊富にあることが当たり前になり物を大切にする精神が薄れてきています。食品産業や家庭において食べ残しや食品の廃棄を大量に発生させており、食品廃棄物（1,972 t）のうち、一般家庭から発生する割合は約58%（1,134t）、家庭における食品ロス率は世帯全体では3.7%、単身世帯では6.4%となっています。「もったいない」の精神を大切にする取組を広める必要があります。

図表 31 世帯における食品ロス率



資料：「食品ロス統計調査(平成18年度調査)」(農林水産省)

図表 32 食べ残しや廃棄の理由



資料：「食品ロス統計調査(平成18年度調査)」(農林水産省)

②ゴミの減量化・再資源化への積極的な取組を食品廃棄の問題への取組に発展させていくことが期待されます。

○1人1日あたりの一般廃棄物の発生量は全国平均に比べ低い状況にあります。また、一般廃棄物の再資源化率は全国第6位で自治体の取組が進んでいます。こうした取組を「もったいない」の視点で食品廃棄の問題にも向けていくことが県民の食品廃棄への問題意識を高めることにつながります。

図表 33 1日1日あたりの一般廃棄物発生量の推移 (g/人日)

	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
千葉県	1,059	1,060	1,062	1,056	1,040	1,126
全 国	1,132	1,124	1,111	1,106	1,086	1,131

*平成17年度から集団回収量を含めて算出

資料：千葉県環境生活部資源循環推進課資料

図表 34 一般廃棄物の再資源化率の推移

	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
千葉県	19.9% (全国3位)	21.4% (全国3位)	23.2% (全国1位)	23.6% (全国3位)	24.2% (全国2位)	24.4% (全国6位)
全 国	14.3%	15.0%	15.9%	16.8%	17.6%	19.0%

資料：千葉県環境生活部資源循環推進課資料

2. ちばの「食育」を支えるちからは食育推進の原動力

(1) 豊かな自然と四季を通じ豊富な食材に恵まれた活力あふれる農林水産業県「ちば」

- ①四方を川と海に囲まれ、水と緑の豊かな自然に恵まれ、親潮と黒潮が出会い気候は温暖です。
- ②農業、畜産業、水産業の生産額が全国トップクラスで、バランスがとれています。
- 温暖な気候で四季を通じ四季を通じて山の幸、海の幸が豊富で、季節を感じ、旬のものを味わうことができます。

農業産出額:全国第4位(平成17年:生産農業所得統計)
 野菜産出額:全国第1位(平成17年:生産農業所得統計)
 畜産産出額:全国第6位(平成17年:生産農業所得統計)
 水産業(海面漁業生産量):全国第6位(平成17年:農林水産統計)

ちばのいちばん
 (全国1位の農水産物)

野菜編
 ねぎ、だいこん、にんじん
 えだまめ、ほうれんそう、
 さといも など

魚介編
 イセエビ、スズキ類
 カタクチイワシ

- ③大都市圏の多くの人口を抱える都道府県の中では、トップクラスの食料自給率を誇っています。

図表 35 都道府県別の食料自給率:人口500万人以上の都道府県 (%)

	カロリーベース	生産額ベース		カロリーベース	生産額ベース
都道府県名	16年度(確定値)	16年度(確定値)	都道府県名	16年度(確定値)	16年度(確定値)
全国	40	69	愛知県	13	37
千葉県	30	76	埼玉県	12	23
東京都	1	5	北海道	200	180
大阪府	2	6	兵庫県	16	38
神奈川県	3	13	福岡県	19	40

資料:農林水産省試算資料

④残留農薬の問題など食への不安が高まる中、安全・安心な農産物を提供するため、千葉県独自の「ちばエコ農産物」認定制度を平成14年度から設けるなど、環境保全型の農業の推進に取り組んでいます。

○「ちばエコ農産物」の栽培面積、栽培品目数、認定生産者が年々増えており、「ちばエコ農産物」の認知度も高まってきています。

図表 36 「ちばエコ農産物」の認知度 (単位：%)

	知っている	知らない
平成15年度調査	19.8	80.2
平成17年度調査	34.7	64.8
平成18年度調査	39.8	58.5

資料：平成18年度第32回県政に関する世論調査結果

(2) 食(住)と農が近接し、都市と農山漁村が共存する、「見ること」「知ること」「話すこと」そして「体験すること」ができる地域環境を持つ「ちば」

①都市部においても農業が盛んで、県内の各地域で食(住)と農が近接しています。

○身近なところで農業との接点があり、農業者との直接的な関わりが持ちやすく、地域に応じた食農教育を取り入れやすい環境にあります。

図表 37 地域別の主要生産物

千葉・東葛地域	小松菜やホウレンソウなどの野菜栽培が盛ん
海匝・香取・印旛地域	キャベツやニンジン、スイカなどの野菜栽培、水稲や畜産が盛ん
山武・長生地域	水稲のほか、メロンやトマトなどのハウス栽培が盛ん
君津地域	水稲、野菜、畜産がバランスよく生産
夷隅地域	水稲を中心にタケノコなどの生産が盛ん
安房地域	カーネーション、ストックなどの花やイチゴ、ビワの生産のほか、酪農が盛ん

②食(住)と農が近接しているちばの特長をいかした、学校給食における主要な千葉県産農産物の活用や米飯給食の普及が進んでいます。

○学校給食における千葉県産の主要な農水産物の活用が進んでいます。地元でとれる新鮮な農水産物の活用を進めることで、食(住)と農が近接しているちばの特長をいかした生産者の顔が見える学校給食の実施など特色ある取組を推進していくことができます。

また、学校給食における米飯給食の実施率は100%で、1週間に平均

3.2回の米飯給食が実施されており、全国平均（2.9回）に比べ高い水準にあります。

図表 38 平成 17 年度学校給食における地場産物の活用状況

	千葉県	全 国
食材数ベース	23.0 (%)	23.7 (%)

資料：文部科学省 平成 17 年度学校給食における地場産物の活用状況

図表 39 平成 17 年度学校給食における主要な農産物の県産物活用状況

	千葉県産(kg)	県外産(外国産含)(kg)	総使用量(kg)	県産割合(%)
いんげんまめ	1,026	320	1,346	76.2
パセリ	313	64	378	83.0
だいこん	13,352	889	14,241	93.8
かぶ	3,415	105	3,520	97.0
しょうが	209	1,091	1,300	16.0
キャベツ	57,126	9,065	66,191	86.3
さといも	5,827	1,731	7,558	77.1
トマト	1,719	1,407	3,126	55.0
にんじん	73,209	2,704	74,507	98.3
ねぎ	19,897	5,606	24,923	79.8
ほうれんそう	20,214	1,381	21,127	95.7
ごぼう	1,413	6,529	7,737	18.3
合 計	197,718	30,892	225,951	87.5

資料：平成 17 年度学校給食における県産農産物活用状況調査（千葉県）

③新鮮でおいしい旬の農産物を身近に手に入れることができる直売所や自然・農林漁業体験ができる施設など、観光と体験、地場産物の購入が可能な施設が県内各地にあり、多くの人に利用されています。

○地場産物の入手がしやすく、地元の人々の活力（いきがい）にもなり、また、食育活動の拠点としての発展が期待できます。

図表 40 農林水産物直売所の状況：千葉県

	施設数 (箇所)	参加農家数 (戸)	購入者数 (千人)	年間販売額 (百万円)
平成 18 年度	218	17,361 (回答数 198)	8,784 (回答数 135)	11,463 (回答数 142)
		87.7 戸／箇所	65.1 千人／箇所	80.7 百万円／箇所

*「購入者数」と「年間販売額」は、平成 17 年 4 月～平成 18 年 3 月の数値

資料：平成 18 年度農林水産物直売所実態調査結果

図表 41 農林漁業体験施設等の状況：千葉県

	農林業体験		農林漁家レストラン (箇所)	農林漁家民宿 (箇所)
	施設数 (箇所)	利用者数 (千人)		
平成 18 年度	389	2,494 (回答数 216) 11.5 千人/箇所	25	52

*「利用者数」は、平成 17 年 4 月～平成 18 年 3 月の数値

資料：平成 18 年度農林漁業体験施設等実態調査結果

(3) 地域色豊かな食文化や郷土料理、伝統的な食産業の歴史を持つ「ちば」

①郷土料理や行事食など地域色豊かなちばの食文化が、引き継がれています。

図表 42

ちばの郷土料理	太巻き寿司、性学もち（別名：つきぬきもち）、はば雑煮、菜の花のからし和え、落花生みそ、いわし団子のつみれ汁、あじのさんが、あじのたたき（なめろう）、鯨のたれ など
---------	---

②伝統的な食産業である醤油製造などの食品工業が地場産業として盛んです。

- 体験を通じた生産から加工、製造までのプロセスを理解する場があります。

製造品出荷額：全国第 7 位
食料品製造業：全国第 6 位
醤油製造業：全国第 1 位
(平成 16 年工業統計)

(4) 食育をサポートする意欲あふれる多くの人材や企業を持つ「ちば」

① ちばの食育を学校や地域でサポートする千葉県独自の制度である「ちば食育ボランティア」の登録数は 5 千人を超えており、地域における食育活動を実践しています。また、食育活動の推進に協力する「ちば食育サポート企業」には 101 社が登録しています。

- 食生活改善の指導や相談、食文化の紹介、農林漁業体験の受け入れや栽培指導、郷土料理や家庭料理の指導、食や栄養・農林水産業に関する知識の普及などの分野で食育活動をサポートする「ちば食育ボランティア」が着実に増加し、現在 5 千名を超える人が登録しており、県内各地

域でまんべんなくサポートできる体制が整っています。
 こうした貴重な人材を積極的に活用し、学校や地域における食育活動を
 より活性化していくことが必要です。

図表 43 ちば食育ボランティア登録人数

登 録 期 間	登録人数
平成 19 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日	5,081 名

図表 44 ちば食育ボランティアの地域別登録人数

地域名	登録人数	地域名	登録人数
千葉地域	1,310	山武地域	842
東葛飾地域	465	長生地域	199
印旛地域	188	夷隅地域	713
香取地域	65	安房地域	611
海匝地域	390	君津地域	298

- 「ちば食育サポート企業」は、独自に食育活動を行う、あるいは、公的機関や「ちば食育ボランティア」が実践する食育活動に支援・協力する企業で、現在、101社が登録しています。千葉県が独自に取り組んでいる特色ある制度で、こうした企業と食育ボランティアや公的機関、食育実践団体などの連携を一層進めることで、地域における食育活動の輪を広げていくことができます。

図表 45 ちば食育サポート企業

登 録 期 間	登録企業数
平成 18 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日	101 社

- ②「食の教育」を行う栄養教諭や学校栄養職員の人数が多いのが千葉県の特徴です。
 - 小・中学校における栄養教諭・学校栄養職員の数は、東京都に次いで全国第2位で、学校当たりの数で比較すると、全国第1位の割合です。
 - 学校における指導計画の作成や食育への取組などに、「食の教育」を行う栄養教諭や学校栄養職員の活用が期待されます。
 - 平成18年度から配置が開始された栄養教諭について、適正な配置と学校栄養職員との連携した取組を進めることが大切です。

図表 46 栄養教諭・学校栄養職員配置状況：国公立小・中学校

	栄養教諭・学校栄養職員数 (A)	小・中学校数 (B)	(A) / (B)
千葉県	707人	1,273校	0.56
全国	10,747人	34,158校	0.31

資料：平成17年度学校給食実施状況調査（文部科学省）及び
平成17年度学校基本調査（文部科学省）を基に作成

③県内にある大学等の知的財産の活用が期待されます。

○県内には、栄養学、教育学、歯学、農学など食育に関連した学部を持つ多くの大学があります。食育に関する多くの知的財産を有する恵まれた環境をいかし、大学等との連携を進めることで食育推進のための人材育成や調査研究などの推進が期待されます。

④県民一人ひとりの健康や生活状況に応じた健康づくりをサポートする取組が進んでいます。

○「健康生活コーディネーター」やメニューの栄養成分の表示を行う飲食店「健康ちば協力店」との連携により、地域でのより良い食環境づくりが期待されます。

健康ちば協力店の数
735店（平成19年6月22日現在）

(5) 食に対して、おおらかで前向きな県民性を持つ「ちば」

①生き甲斐や楽しみをもって暮らすためには、健康で長寿でいることが大切です。千葉県の65歳以上の平均自立期間*は、男女とも全国6位で、「お達者度**」は女性が全国1位、男性が全国2位で高い水準にあります。

* 平均自立期間：高齢者が痴呆や寝たきりにならない状態で、介護を必要としないで生きられる期間

** 「お達者度」：平均自立期間を平均余命で割った割合

○県民一人当たりの国民健康保険診療費は全国で2番目に低く、人口10万人当たりの生活習慣病による死亡者数も全国5番目に低い状況ですが、急速な高齢化とともに悪化することが懸念されます。

* 総務省統計局：「社会生活統計指標」平成15年度時点

図表 47 平均自立期間

()全国順位

男性			女性		
平均余命 (年)	平均自立 期間 (年)	お達者度 (%)	平均余命 (年)	平均自立期 間 (年)	お達者度 (%)
16.77(18)	15.51(6)	92.5(2)	21.30(28)	19.15(6)	89.9(1)

資料：健康ちば21（平成14年12月）

②質・量ともにきちんとした食事をしている人の割合が増加しています。

図表 48

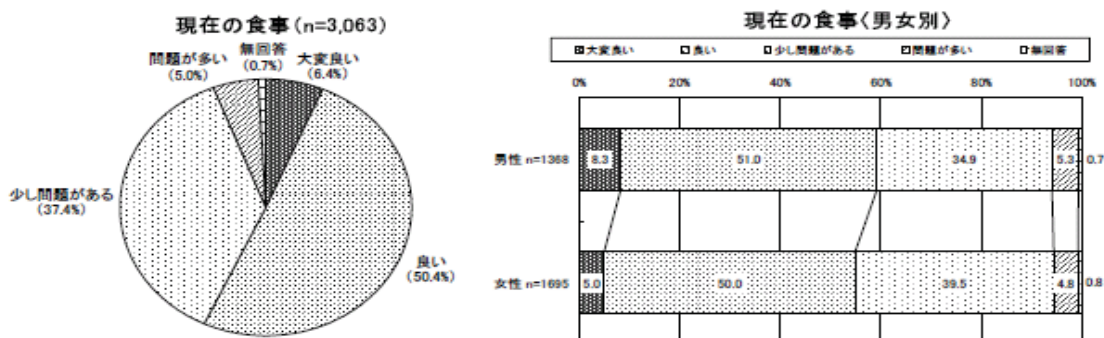
1日最低1食、きちんとした食事を2人以上で楽しく、30分以上かけて食べている人の割合	平成12年度	平成17年度
	72.7%	76.4%

資料：千葉県民健康・栄養調査（平成12年度・17年度）

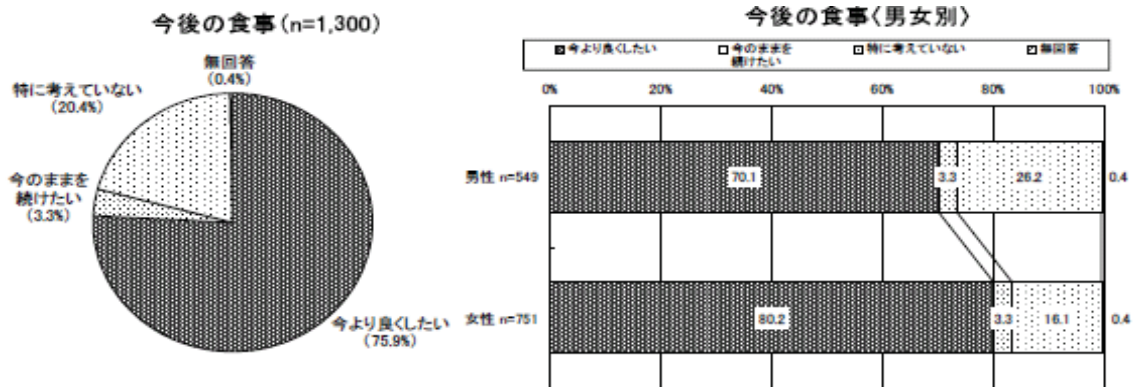
③多くの県民が食事の改善意欲を持っています。

- 現在の食事に満足している人が57%おり、食事に問題があると認識している人（42%）のうち76%の人は改善意欲を持っています。
- 改善意欲を持っている人に必要な情報を提供していくことで全体として食生活の向上につながることを期待されます。

図表 49 現在とっている食事の満足度（千葉県）



図表 50 問題があると認識している現在の食事の今後(千葉県)



資料：生活習慣に関するアンケート調査報告書(平成18年3月：千葉県)

④食生活指針の実践度は全国平均に比べ高い水準です。

○食生活指針の実践度に関する意識調査結果では、

- ・食事を楽しみましょう。
- ・主食、主菜、副菜を基本に、食事バランスを。
- ・ごはんなどの穀物をしっかりと。
- ・食文化や地域産物をいかし、ときには新しい料理を。

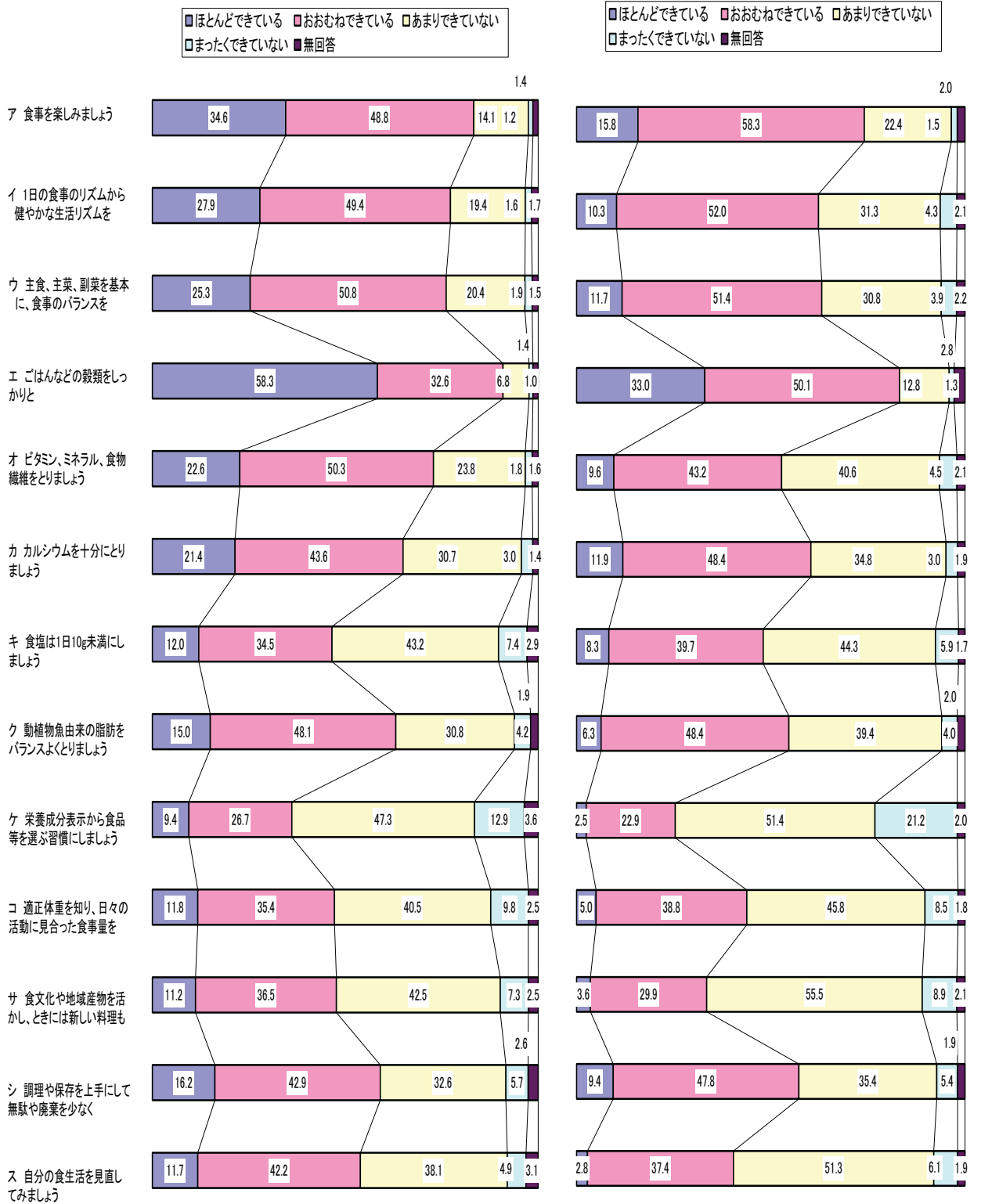
などの項目で、おおむねできていると答えている人が全国平均を大きく上回っています。

○こうした食生活への意識が高い面は醸成していきながら、食生活指針の内容について、しっかりした理解を促していくことも大切です。

図表 51 食生活指針全般に関する実践度

食生活指針全般に関する実践度(千葉県)

食生活指針全般に関する実践度(全国)



資料：平成 17 年度食生活指針に関するアンケート調査(千葉県)

資料：平成 17 年度食生活指針・食育に関する認知度調査報告書(財団法人食生活情報サービスセンター)

(6) 県民運動の広がりの萌芽となる地域に根ざした個々の活動が進む
「ちば」

- ① 県内各地で食育活動の個々の取組が進んでいます。活動団体・企業・行政等がさらに連携を深めることにより、県民運動として大きく展開することが期待されます。
- 地元のNPOや農業生産者等が関わって独自の取組が行われています。今後は現在の取組がさらに効果的なものとなるよう、情報交換や地域間連携を図ることが必要です。
 - 本県には、すでに行政組織としての部局間が連携した食育推進のプロジェクトチームがあり、また、県内各地域には農林振興センターを事務局として、健康福祉センター、教育事務所、市町村、食育関係団体等で構成された地域連携の土台となる組織があります。このような行政組織の連携はもちろん、地域の各団体、企業、専門家、NPO等がさらに連携を深め、協働して食育に取り組んでいくことが、地域における食育活動を活性化させ、より効果的な食育の推進につながります。